青森県総合学校教育センター　教科等教育長期研究講座報告［2011.3］
Ｇ９－０２

中学校　英語

英語科における自律的学習者の育成を目指した指導法の研究
－学びの自律性を高める指導サイクルの構築－

外ヶ浜町立蟹田中学校　　教諭　　佐々木　　紀　人

要　　旨

本研究では，英語科における「中学校段階での自律的学習者」を定義し，「教師の役割」を確認した上で，「学びの自律性を高める指導サイクル」を構築することが，自律的学習者の育成に有効であるかどうかを検証した。その結果，生徒には学習ストラテジーの使用などに変化が見られ，それらの取組が有効であることが確認された。

キーワード：中学校　英語　自律的学習者　教師の役割　指導サイクル　学習ストラテジー

Ⅰ　主題設定の理由

本校の生徒は明るさと素直さをあわせもち，何事にも協調的に取り組む反面，学習に関しては自律性が十分ではなく，学びを学校に依存する傾向が強い。よって，最近の校内研修会では，学びの自律性の育成ということが話題に上るようになった。また，中学校学習指導要領解説外国語編（平成20年９月）の冒頭では，「知識基盤社会」について触れ，今後は「新しい知識・情報・技術」が「飛躍的に重要性を増す」時代になると述べている。既存のものだけでは立ち行かなくなるこの知識基盤社会においては，学びを他者に依存するのではなく，自分に必要なものを自分の手で取りにいくといった自律的な姿勢が必要となる。

自律的学習者の育成に関する第二言語習得研究の取組を参考としながら，中学校英語科なりの自律的学習者の育成の在り方を模索したいと考え，本主題を設定した。

Ⅱ　研究目標

英語科の学習において，自律的学習者を育成するためには，学びの自律性を高める指導サイクルの構築が有効であるということを，実践を通して明らかにする。

Ⅲ　研究仮説

英語科の学習において，学びの自律性を高める指導サイクルを構築し，生徒がその意義を理解して学習活動に取り入れていけば，自律的学習者は育成されるであろう。

Ⅳ　研究の実際とその考察

１　本研究における「中学校段階での自律的学習者」の定義

本研究では，「中学校段階での自律的学習者」を「教師の適切な指導の下に，学習目標を決め，それを実現するための計画を立て，実行し，結果を自分自身で評価できる学習者のこと」と定義する。

これまでも，学びの自律性に関する定義は多くの研究者によってなされてきたが，そこに共通することは，学び

表１　ディキンソンが提示する自律学習の３段階

Self-Instruction	学習者が教師からの直接的な操作を受けずに活動する学習状況。自律学習の中立的な表現。
Self-Direction	学習における全てを決定する責任を学習者が持つ状況。ただし，完全に学習者自身だけで実行するところまではいかない。
Autonomy	学習者が学習の全ての意志決定と実行を責任を持って行う完全な意味での自律した状況。教師の関与はない。

（ Dickinson,　1987 / 上田和子・羽太園 ）

の自律性とは，学習者が目標を立て，計画し，実行して，評価できる力を備えているという点である。ただし，本研究の対象が，英語学習の入門期にある中学生であるということを踏まえると，中学生にふさわしい発達段階を加味しなくてならないと考えた。そこで，上田和子・羽太園がまとめたディキンソンの提示する自律学習の３段階（表１）を考慮した上で，「中学校段階での自律的学習者」の定義を定めた。

２　自律的学習者を育成するための「教師の役割」

本研究では自律的学習者を育成するための「教師の役割」というものを意識した。辞書によれば「自律」とは，「外部からの制御から脱して，自身の立てた規範に従って行動すること」だが，言語教育においては，中田が「学習者がオートノマスになるような実践を行うことは，教師が不要であることを意味するのではなく，むしろ知識伝達者から学習の支援者へとその役割を変えることを意味します」（中田賀之，2008）と説明するように，教師は役割を変えつつも，積極的に学習者に関与する必要がある。

この点，梅田康子の主張は有効だと考える。梅田は，Cranton が提唱している成人教育における「教師の役割」を表２のようにまとめ，それを言語教育の立場から考察した。そして，学習者タイプを自律の発達段階に応じて，「他者決定的・自己決定的・相互決定的」の３種類に分類し，更に個に応じて，12種類の「教師の役割」を紹介している。また，成人教育とちがって言語教育には，「言語運用能力や社会文化的能力の育成という独自の目標」があることから，その中でも，「計画者・教授者・ファシリテーター・情報提供者・学習管理者・改革者」の六つの役割が特に重要だと主張している。

そこで，本研究では，これら六つの「教師の役割」をモデルとし，生徒の自律性の発達段階や学習者タイプ，さらには個別性などに合わせて「教師の役割」を使い分けることを試みた。

表２　成人教育における「教師の役割」

役　割	特　徴	使う場面	
専門家	・専門知識を伝える	・詳しい説明と洞察を提供する ・学習者に学習経験がない ・教材を開発する	他者決定的
計画者	・企画する	・学習者に学習経験がない ・教材を開発する	他者決定的
教授者	・何をすべきかを教える ・指示する・指導する	・特定の技能に関する目的がある ・学習者に学習経験がない	他者決定的
ファシリテーター	・ニーズに応える ・奨励する・援助する	・学習者が自己決定的である ・学習者に学習経験がある	自己決定的
情報提供者	・教材を提供する	・個別的な一括プログラム ・上級学習者	自己決定的
学習管理者	・記録する・評価する ・準備する	・個別教育と遠隔教育 ・学習者が自律している	自己決定的
モデル	・行動や価値観のモデルになる	・ほとんどの場合 （特に価値観や複雑な認識にかかわる学習）	
メンター	・助言する・指導する	・長期にわたる関係 ・個人が互いに認めあって，それぞれ自律している	相互決定的
共同学習者	・学ぶ ・学習者とともに計画する	・教育者と学習者が到達目標を共有する ・上級学習者	相互決定的
改革者	・問い直す ・問いを引き出す ・意識を変容させる	・到達目標が個人の意識変容や社会の変化である ・エンパワーメントをめざす	相互決定的
省察的実践者	・実践を検討する ・考え方や理論を展開する	・どんな場合にも	
研究者	・観察する・仮説を立てる ・実践の理論を作る	・どんな場合にも	

（梅田康子，2005）

３　学びの自律性を高めるための取組

(1) 学びの自律性を高める指導サイクルの構築

サイクルの出発点は目標を立てることである。学習動機を高めるには，しっかりとした目標をもつことが大切だと考えた。そこで，青木(2008)を参考にしながら，目標を長期・中期・短期の３段階に分け，目標をもてない生徒に配慮するために長期の目標を教師が，中期と短期の目標を生徒が決めることにした。

次に，自分の立てた目標を達成するための計画を立てさせた。この際，教師は積極的に「学習方法の提案」と「情報の提供」をして，自律学習に必要な学習スキルを身に付けさせたいと考えた。そして表２の「計画者」や「教授者」としての役割を意識しながら，生徒が自ら家庭

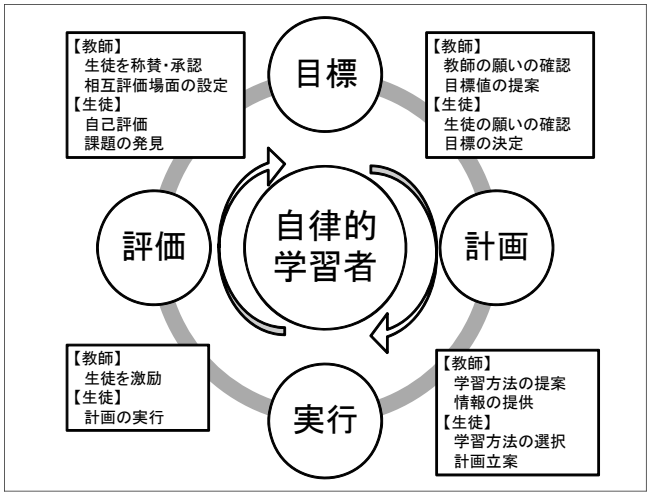

図１　学びの自律性を高める指導サイクル

学習について考えたり，学習方法を選択したりできるようにした。

実行に関しては，仮にそれが計画どおりにいかなかったとしても，なぜうまくいかなかったのかを，教師が生徒に「問い直し」をさせたり，生徒のよい点に目を向けさせたりした。

最後に評価活動をさせた。生徒はその週の取組を振り返り，「Self-Evaluation　Sheet」に反省を記入する。そして，教師はそれに対してコメントをする。このような取組をすることで，生徒は次の活動に向けて新たな課題を発見することができると考えた。また，提出物やパフォーマンス・テストを相互評価させれば，互いの取組を参考とし，よりよいものを目指すのではないかと考えた。

(2) 学びの自立性を高めるための日常的取組

ア　辞書指導

本研究では，辞書の活用が自律的学習者を育成するのに有効な手段であると想定し，生徒が授業及び家庭で辞書を活用できるように工夫した。以下はその根拠である。

平成20年３月告示の中学校学習指導要領（以下，新学習指導要領とする）の「３　指導計画の作成と内容の取扱い」では，辞書指導について，「カ　辞書の使い方に慣れ，活用できるようにすること」と示されている。これは，現行学習指導要領（平成10年12月告示，平成15年12月一部改正）に示されている，「辞書の初歩的な使い方に慣れ，必要に応じて活用できるようにすること」という表現と比較すると，一歩踏み込んだ内容となっている。また，中学校学習指導要領解説外国語編（平成20年９月）では英語の学習において辞書の活用は必要不可欠であるとし，３学年間を通して適宜活用させるように述べている。

これらを受け，授業では具体的に次のように辞書指導をした。

> １　調べた単語の意味・綴り・発音を辞書で確認し，辞書にマーカーで印を付ける。
> ２　プリントやノートの余白に，調べた単語が載ってある辞書のページ数を記入する。
> ３　例文，関連語，文法のポイントにも目を通す。
> ４　必要だと思ったら，一人勉強ノートに練習する。

なお，辞書指導における教師の役割は，表２に示した「教授者」である。

イ　ジャーナルの取組

本年度の４月から，ALT と協力して，継続的にジャーナル（英文日記）に取り組んできた。方法は，生徒が毎週末３日分のジャーナルを書いて提出し，ALT がそれを添削・評価し，コメントを付けて返すというものである。

久保田は，提出物の意義について「学習の自己管理を行う習慣を身につけることで，生涯学習につながる自律的な学習者を養成する」（久保田章，2010）と述べている。本研究でも，ジャーナルを継続的に出させることで，生徒の学びの自律性を育成できると想定した。また，自律性の高まりは「書く」意欲へつながると予想されるので，ジャーナルの変化を見れば，生徒の変容を確認できると考えた。

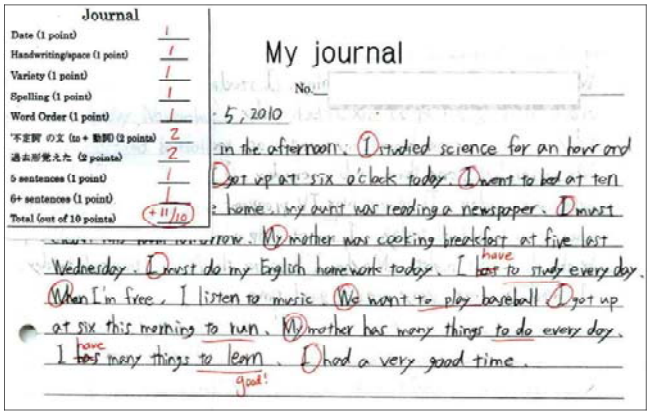

図２　ジャーナルの例

この活動における教師の役割は，表２の「ファシリテーター」として生徒の活動を奨励し，「学習管理者」としてジャーナルを評価・管理することとした。

ウ　フィードバックの工夫

ジャーナルをはじめとする生徒の様々な活動に対して，教師若しくは生徒が，適切にフィードバックをすれば，生徒の学習意欲が向上して，学びの自律性は高まると考えた。

上杉(2007)は，教師のフィードバックを基に，生徒が文章の間違いを訂正する活動を行った。その結果，フィードバックから書き直しに至るまでの活動が，生徒の学習意欲にプラス効果があることを示唆する結果を得た。また，髙木は，「読後に感想などのフィードバックを受けることで，身近な相手に自分の書いた文を理解してもらえたという達成感を得て，以後の書き直しなどの活動につなげていける」

（髙木晋，2009）としている。こうしたことから，教師から生徒への，若しくは生徒同士でのフィードバックは，学習者の意欲を引き出すのに有効であると判断した。具体的には，ジャーナルの回し読み，提出物へのコメント書き，また，図３のようによい取組や努力が認められる取組の紹介などを行った。

この活動における教師の役割は，表２に示した「学習管理者」を想定している。

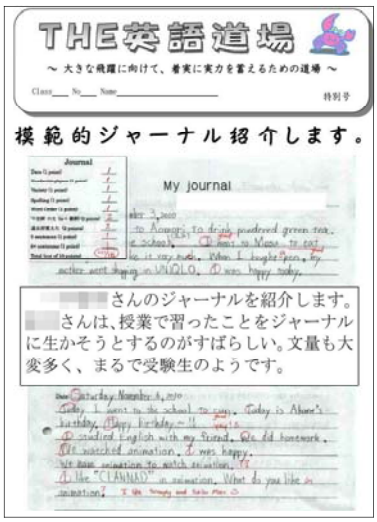

図３　フィードバックの例

エ　協同学習の推進

本研究では，自律性を高めるための最も身近な学習ストラテジーの一つとして協同学習を想定した。

ここで言う協同学習とは，新学習指導要領の「３　指導計画の作成と内容の取扱い」の中で触れられているペアワークやグループワークなどの学習形態を適宜取り入れた学習である。

阿川は，「協同学習などのグループワークは，学習者の自律を促すのに有効である」とし，更にそれは「自律を促すほかにも，学習の成果や生産性を高め，動機付けに貢献し，協調的人間関係を築くなどの能力を育成できる」（阿川敏恵，2007）としている。

こうしたことから，本研究では人間関係に配慮した上で，英語を得意とする生徒と不得意とする生徒がペアを組めるような，英語学習専用の席を設けた。また，グループワークを行う際には，原則４名からなる男女それぞれのグループを編成し，話合い活動や教え合い活動のしやすい環境を作った。ただ，生徒が活動をする際には，「１．自力で考える　２．辞書・ワークシートを使って調べる　３．班員に聞く　４．教師に聞く」という学習の手順を確認し，安易に教師が介入しないようにした。

オ　Self-Evaluation Sheet （自己評価シート）の活用

「学びの自律性を高める指導サイクル」の「評価」の活動には，「Self-Evaluation Sheet」（図４）を使用した。

このシートには，長期・中期・短期の目標が記載されており，これらの目標を可視化することで，常に目標を意識させようと考えた。また，一日の自分の取組を振り返って三段階で評価させ，更に一週間ごとに文章で自己評価させた。それに対しては教師もコメントを書くが，その際には，三宅が主張するように「「学習管理者」として学習のプロセスに寄り添いながら，「ファシリテーター」としてそれを励ます」（三宅若菜，2006）ことを意識した。

この際の「教師の役割」は，表２に示した「学習管理者」と「ファシリテーター」を想定した。

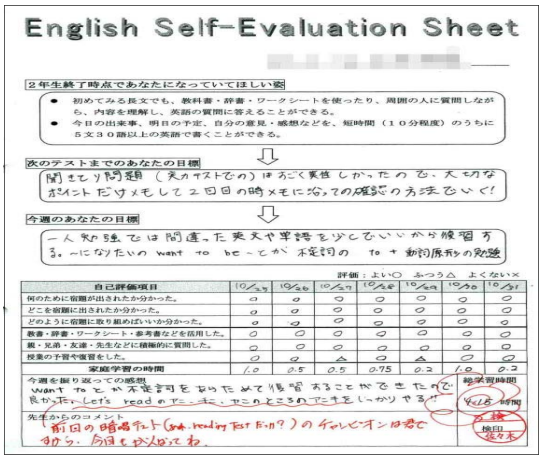

図４　Self-Evaluation Sheetの例

カ　家庭学習のポイント提示

５月初旬に行った生徒との面談では，２年生の生徒23人中８人の生徒が，「やる気はあるのだが，何を勉強すればよいのか分からない」と答えている。そこで，授業の中で「何を・どのように・どれぐらい」勉強すればよいのかという家庭学習のポイントを提示した。これは「教授者」として役割を意識したもので，こうすることで，英語の苦手な生徒でも，積極的に家庭学習に取り組むようになるのではないかと考えた。

４　検証

学習者がどれだけ自律的に学習を進めていけるようになったかについては，学習者の学習ストラテジーと自信の変容を見ることが大切であるということが，幾つかの先行研究で指摘されている。本研究では，自信の変容は学習に対する「動機」の変容となって表れるととらえ直し，「動機」と「学習ストラテジー」の変容に視点を置いて，分析を進めていくこととした。

(1) ジャーナルの分析から

ジャーナルを分析するに当たっては，測定のポイントを「動機」に置いた。もし，生徒の書く活動に対する「動機」が高まれば，それはジャーナルで使用する単語数・文数・新文型使用数の増加となって表れると考えたからである。

今回，分析対象としたのは，本校の２年生23人が書いた，４月23日から11月７日までのジャーナル，全46回分である。そして，ジャーナルを点数化するに当たっては，１語１点，１文２点，新文型使用３点として計算した。なお，新文型は単元ごとでとらえた。例えば，Lesson５を学習しているうちは，その単元で学習した文型を新文型とみなすことにした。

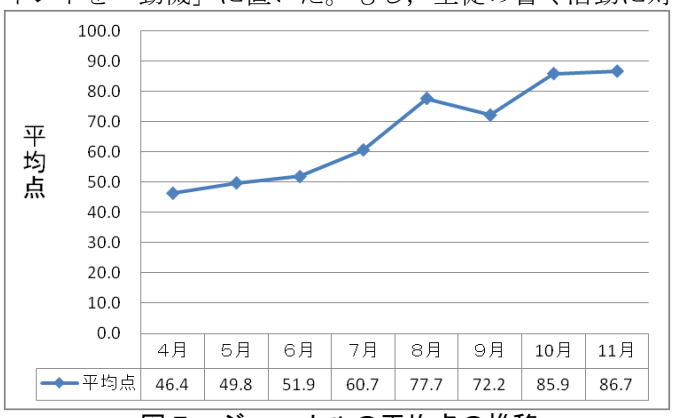

図５　ジャーナルの平均点の推移

図５は，ジャーナルの学級全体の平均点を月ごとに出し，その推移をグラフ化したものである。この分析から，４月には46.4ポイントだった平均点がその後は少しずつ右肩上がりに上昇し，11月の平均点は，４月のおよそ倍に当たる86.7ポイントまで達したことが分かった。語数や文数などの細かい指示を与えない状況で，図８が示すような，数値の大幅な上昇が見られたということは，書く活動に対する「動機」が高まってきた結果だと考えられる。

(2) 授業の分析から

生徒の授業における学びの自律性を検証するため，９月６日，９月27日，10月29日の３回に分けて検証授業を実施し，それをビデオで撮影して，一人一人の行動を記録した。検証のポイントは，「学習ストラテジーの使用」である。もし，学びの自律性が高まっていれば，生徒は初見の英文であっても，学習ストラテジーを駆使して，自分の力でその英文を読み進めていくと考えた。この検証授業において想定している学習ストラテジーとは，辞書の活用・日ごろ授業で使っている文法解説などが付いたワークシートの活用・協同学習である。初見の英文には，現在使用している教科書以外のものから，同じ言語材料を扱った145～160語程度の文章を使用した。

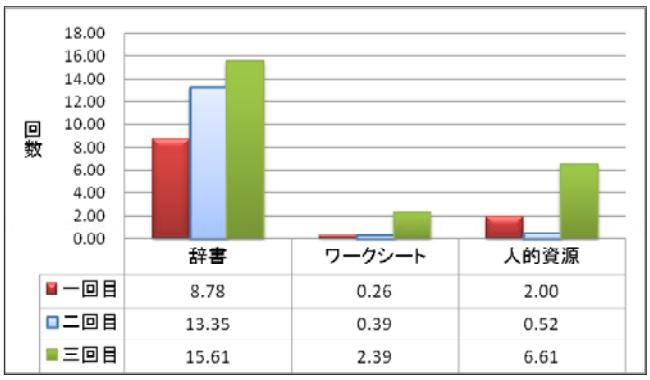

図６　学習ストラテジーの活用回数

図６が示すように，検証授業の結果からは辞書やワークシートの使用回数が以前よりも増加し，更に，班員や教師といった人的資源を学習ストラテジーとして活用できるようになってきたことが分かった。ここで着目したい点は，人的資源の活用回数の平均が2.0から6.6へと上昇したことである。これは，「自律的学習者」を育成するための取組として行ってきた協同学習の成果が現れてきたものと考える。また，このデータ以外にも，手遊びや私語の回数が減少したことが判明し，自律性の高まりを感じさせた。

(3) ワークシートの分析から

自律性の向上は，日ごろ授業で使っているワークシートにも表れてきている。最近は，教師の言葉をメモしたり，分からない単語を調べて書き込んだり，あるいは発展的な学習内容を記述する生徒が見られるようになってきた。

図７は，ある男子生徒のものである。ワークシートの空欄には，

「I drink.=酒を飲む」

「I want to water.= 花に水をあげる」

などの発展的記述のほか，教師の言葉をメモしている。指示がなくとも，自分なりに学習の仕方を考え，このような変化が見られるようになったと

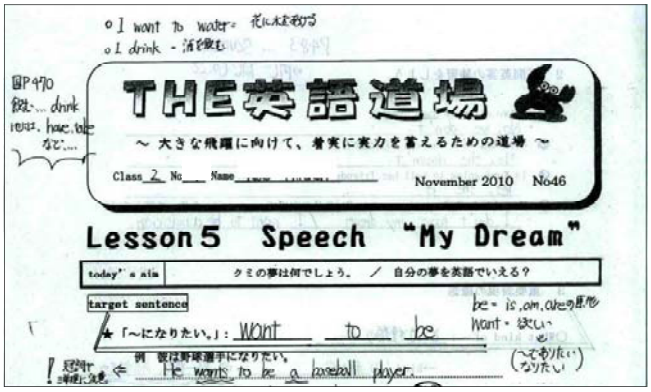

図７　ワークシートに見られる変化

いうことは，まさに生徒の自律性の高まりを表していると考える。

Ⅴ　研究のまとめと課題

１　研究のまとめ

本研究では，「中学校段階での自律的学習者」を定義し，「教師の役割」を確認した上で，「学びの自律性を高める指導サイクル」を構築した。そして，そのサイクルの中に，自律性を高める活動を組み入れ，サイクルを機能させることが，「中学校段階での自律的学習者」を育成するのに有効であるかどうかを検証してきた。その結果，「学びの自律性を高める指導サイクル」を構築することは，「自律的学習者」を育成するのには有効であることが確認された。ただし，そのためには，教師が学びの自律性を高めるための自らの役割を自覚し，それと同時に，生徒に学び方を教えながら，若しくは気付かせながら，自律性が高まるのをじっと待つことが必要であることも分かった。

２　本研究の課題

中学校段階での自律的学習者の育成を目指して進めてきた本研究であったが，追究しきれなかった課題が二つある。それは，時間的制約によって生ずる課題と教師間の連携・共通理解といった課題である。

自律的学習者の育成ということを念頭に置くと，一年というスパンでは時間が十分ではない。また，例えば生徒にとって，１年生まで教えた教師と２年生から教える教師の指導方針が全く違っていたとしたら，自律的学習者は育ちにくいと考えられる。よって，今後，自律的学習者の育成を中学校で実現するためには，より綿密な計画，より緊密な指導体制，並びに教科や学年といった垣根を越えた協力体制を構築することが重要であると考える。

＜引用文献＞

中田賀之　2008　「今，なぜ英語教師にオートノミーが必要か」　『英語教育　vol.56　No.12』，pp.25-26，大修館書店

久保田章　2010　「提出物による学習意欲の活性化　大学英語での試み」　『英語教育　Vol.59　No.7』p.42，大修館書店

髙木晋　2009　「中学校英語科における書く力を高める指導の在り方を探る　－『書くこと』の指導段階のモデルの提案－」　『平成20年度青森県総合学校教育センター研究紀要』，p.81，青森県総合学校教育センター

阿川敏恵　2007　「協同学習を用いた大学授業　－自律した学習者の育成を目指して－」　『恵泉女学園大学紀要　19』，p.52，p.60，恵泉女学園大学

三宅若菜　2006　「自律学習を基盤とした日本語授業における教師の役割　－「チュートリアル」の学習記録から－」　『桜美林言語教育論叢　第二号』，p.114 ，　桜美林大学言語教育研究所

＜参考文献＞

青木直子　2001　「教師の役割」　青木直子・尾崎明人・土岐哲編『日本語教育学を学ぶ人のために』世界思想社

上田和子・羽太園　1999　「パフォーマンス・チャートの実践　―外交官・公務員日本語研修における自律学習―」『日本語国際センター紀要　９』　国際交流基金日本語国際センター

上杉美恵子　2007　「思いや考えを適切に書くことへの意欲を高める学習指導の工夫」　『平成18年度１か年及び６か月長期研修員研究報告書』　岡山県教育センター

梅田康子　2005　「学習者の自律性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割　―学部留学生に対する自律学習コース展開の可能性を探る―」　『言語と文化　12』　愛知大学語学教育研究室

三宅若菜・福島智子　2005　「自律学習を基盤とした個別対応型日本語授業に関する一考察　―教師の役割を手がかりに―」　『日本語教育論集　21』　国立国語研究所

ガンツェツェグ　2007　「モンゴルにおける日本語教育の改善　－自律学習能力を高めるために－」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究　２』　昭和女子大学

＜参考ＵＲＬ＞

青木直子　2008　「『日本語ポートフォリオ』とアドバイジング」
http://www.let.osaka-u.ac.jp/~naoko/jlp/pdf/handouts/advising2008.pdf　(2011.1.26)